

各位

金蘭千里中学校

本校入学者選抜試験問題に関してのお願い

昨今、教育現場における著作権の在り方が議論されています。  
本校も、著作権法に基づいた著作物の適切な運用と管理に取り組んでいます。

本校の入試問題の利用につきましても、下記の点にご留意いただき、適切なご利用をお願いいたします。

記

1. 本入試問題の著作権は、本校に帰属します。複製の作成は、事前に申告いただいた場合のみ許諾します。
2. 本入試問題で引用している文学作品等の第三者の著作物は、関係団体を通じて、引用の許諾申請を行っています。

以上

# 令和3年度中学入試

## [後期入試]

### 国語科 問題

#### 注意事項<sup>じこう</sup>

1. 試験開始後すぐ、日本語リスニング音声の問題が流れ始めます。
2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
3. この問題冊子は、表紙を<sup>ふく</sup>含めて16ページあります。

試験中に、印刷が見つらかったり、ページの乱れや<sup>ぬ</sup>抜け落ちに気づいたりした場合は手を挙げて<sup>かんとくしや</sup>監督者に知らせなさい。

4. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
5. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り<sup>はな</sup>離してはいけません。

[後期入試] 受験番号 \_\_\_\_\_

金蘭千里中学校



①日本語リスニング ※試験開始後、すぐに音声がかかります。

〈音声をきいて、記号で答えなさい〉【余白にメモをとってもかまいません】

(一) 【音声は2回流れます。】

|   |                     |   |        |   |         |
|---|---------------------|---|--------|---|---------|
| ア | 牛カルビ肉               | イ | 牛タン肉   | ウ | 牛ステーキ肉  |
| エ | ピーマン                | オ | ナス     | カ | タマネギ    |
| コ | おろしポン酢 <sup>ず</sup> | サ | 焼き肉のたれ | シ | ステーキ用岩塩 |
|   |                     |   |        | キ | 焼きそば    |
|   |                     |   |        | ク | エリンギ    |
|   |                     |   |        | ケ | シメジ     |

(二) 【音声は1回しか流れません。選択肢<sup>せんたくし</sup>の内容も音声で流れます。】

1  
2  
3  
4

問題に字数制限のあるものは、すべて句読点も一字とする。

②「本村」は植物学研究者を目指すT大の大学院生。シロイヌナズナをこよなく愛し、その葉っぱを顕微鏡で見て細胞の数を数えるという、地道な研究に情熱を燃やしている。次の場面は、実験に熱中するあまり冷静さを欠いた本村が、先輩の「川井さん」に休憩するよう勧められて校舎から出て来た場面である。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

理学部B号館を出た本村は、深呼吸して空を見上げる。黄色い葉をつけたイチヨウの梢が視界に入ってきた。その向こうに、薄い灰色の雲が広がっている。肺に取りこんだ空気が澄んで冷たい。T大構内のあちこちに植えられ、大きく育ったイチヨウの木。それらはいつのまにか葉の色を変え、立ちのぼる黄金の炎のような姿になっていた。本村は毎日、イチヨウの木々のもとを通っていたが、種採りで頭がいっぱいだったばかりに、季節の移ろいにも気づけていなかったのだ。

川井さんの言うとおりだった。私はすぐ、①ひとつのことに没頭しすぎて、視野が狭くなってしまふのがいけない。(注1)イモ掘りのときにも、「観察力を磨かなければ」と反省したのに。よし、今日からは

※

。決意した本村は、T大構内をaサンサクすべく早足で歩きだした。カーデイガンのうえに薄手のジャンパーを引っかけてただけだったので、少し寒かった。でもまあ、体を動かしていれば問題あるまい。いま、なによりも優先すべきは気分転換なのだからと、本村は脇目もふらず前進した。

気分転換ですらも決意して行ふあたりが、本村の生真面目さというか融通の利かなさである。本村の進撃を目撃した学生たちは、「どうしたんだろう、大事な講義に遅刻しそうなのかな」といぶかしんだほどだった。もちろん本村自身は、親の仇を取るがとき表情と勢いになっているとは、②露ほども思っていない。医学部棟の脇を通りすぎ、角を曲がってグラウンドの横手まで順調に歩を進めた。なにしろ広いキャンパスなので、そのころには頬がほてり、指さきもあたたまっていた。

本村の右手に位置するグラウンドでは、十人ほどの学生が黙々とジョギングをしている。左手に目を転じると、こんもりと繁った緑の森が見える。③夏目漱石の小説で有名な池を取り囲む森だ。窪地の底にある池を目指し、本村は急な坂道を下りた。この道は舗装されていない、獣道のようなものだ。

巨大な木々に頭上を覆われ、都心のキャンパス内でちょっとした冒険気分を味わえる。

池のほとりに下り立つ。造園業者だろうか、三人の男性が作業をしていた。一人は斜面で笹の茂みを刈り、残りの二人は腰まで水に浸かった状態で、池に落ちた大量の枯れ葉をザルですくっていた。ゴム製のエプロンと長靴が一体化したような防水服を着用し、抱えもある竹製のザルを器用に操っている。しかし、池は大きい。自然がそのまま残っているかのような**bケイカン**を保つために、人知れず手入れをする業者の努力を思うと、本村はまたも気が遠くなってきた。

砂浜に壮大で華麗な絵を描こうとしても、描くはしから波や風が砂をさらっていつてしまうように。顕微鏡で細胞を調べるのも、池の落ち葉をすくうのも、いつ終わるとも知れぬ行いだ。完了したと一瞬思ったとしても、それは幻。次から次へと、また細胞を調べ、落ち葉をすくわねばならない状況が訪れる。どんな仕事も、ひとの営みも、明確な完成がないという点では同じだなと本村は思う。たとえばだれかを愛する気持ちも、積み重ねても積み重ねても完成ということはなく、それどころかもろく崩れ、移ろうときがいずれ来るものだろう。たぶん本村は恋愛の方面における愛は④棚上げにしている身なので、あまりえらそうなことは言えないが、これまでの観察と(注2)仄聞するところによって、愛の永遠性と堅牢さを即座に信じるのは無邪気にすぎる、という程度のことはわかっている。仕事も、研究も、愛も、それらを行う人々も、いまこの瞬間にすべて消え去ってしまったとしたら。本村は不穏なことを考えた。残るのはいったいなんだろう。

たぶん、植物だ。人間の基準でいう意思も愛も持たぬ植物が、ただただ生命力をほとばしらせ、すべてを呑みつくしていく。降り積もりつづけ、ついに池を埋もれさせる落ち葉。アスファルトを突き破り、くねってのびる無数の根。理学部B号館を、Y田講堂を、覆い溺め取っていく太い枝々。その想像は、おそろしくもありうつくしくもあった。無人の大学を、街を、地球上を、愛を知らぬ植物が緑で(注3)席卷していく。そんな光景を脳裏に思い描き、本村は(注4)陶然とため息をつく。

ヒヨドリが鋭く鳴いて、近くの枝から飛び立った。夢想を破られた本村の眼前で、造園業者はまだ作業をつづけている。笹を刈る機械のモーターがまわる音。リズムカルにザルを動かす手。たとえ終わりがなく、はかない行いだったとしても。だから無駄だ、ということにはならない。⑤本村はそう思い直す。どんな仕事も、研究も、愛も。植物が愚直に光を求めて生きるように、人間もひとに生まれたからには、せずにはいられないのだ。一見、無駄なようにも思える、ありとあらゆる行いを。

研究しようつと。本村は再び歩きだした。だって私にとっては、それがすごく楽しいことなんだから。変かもしれないけれど、顕微鏡で細胞を見てみると、「おお、植物も私も生きてるんだなあ」って実感できるんだもの。しょうがない。せずにはいられないんだから、やるしかない。シロイヌナズナがたくさん種をつけて、私を待っている！ と⑥擬人化ぎじんかするのもよくない癖で、植物に「だれかを待つ」などという考えはないわけだけど、私は⑦「待たれている」ように感じてしまう人間なので、とにかく種を採ろう。

ほんとうじや本郷通りが近いので、車の音がかすかに聞こえる。本村は呼吸を整えつつ、理学部B号館を目指してキャンパス内の道を歩いた。そういえば、このあたりに植えられたイチヨウが、変わった葉っぱをつけるのだった。道の脇に寄り、イチヨウの根もとに目を凝らす。

「あつた！」

本村はかがみこみ、黄色くなって地面に落ちたイチヨウの葉をヒロウ。ふつう、イチヨウの葉は扇あうぎを広げたような形をしているものだが、その葉はちがった。ラッパのように丸まっているのだ。継ぎ目もなく、完全な円錐形だ。黄金色なこともあいまって、「これは小人が落とした小さなラッパで、そつと息を吹きこんだら、本当に音が鳴るんじゃないかしら」などと空想が広がる。T大構内にたくさんあるイチヨウのなかで、この場所に植わった木の、一部の葉だけがなぜかラッパ状になる。ちゃんと調べたわけではないが、たぶん葉の遺伝子になんらかのdヘンイが生じているのだろう。そんなことを思いつつ、ヒロったラッパイチョウをしゃがんだまま眺めていたら、

「本村さーん」

と呼ぶものがある。(注5) えんぷくてい ふじまる円服亭の藤丸だ。理学部B号館のほうから、いつもの自転車を引いて歩いてくる。

「あー」

藤丸が言った。「こんなところにしゃがんで、なにしてたんすか？」

「これを探していました」

本村は持っていたラッパイチョウを差しだした。藤丸は、「ふひゃあ」と妙な声を上げ、おそろおそろといったふうに着っぱをつまんだ。  
「なんだこれ。イチヨウの葉っぱですよ。こんな形、はじめて見たなあ」

(注6) ためつすがめつ、いろんな角度から、丸まった葉を眺めている。

「ここにある木にだけ、なぜかそういう葉っぱがつくんです」

「へえ。妖精が吹くラッパみたいすね」

そう言った直後、⑧藤丸は「しまった」という表情になった。「あー、いまのナシで。ガキくさいこと言いました」⑨本村は唐突に胸が熱くなった。強いて言葉にすれば、それは「感激」だった。本村は首を振った。「いいえ、私もその葉を見ると、いつもそう思います」植物の不思議をまえにして、本村と藤丸は似たような空想をした。不思議だなという気持ちを分けあえたのだ。藤丸の言葉からそれが伝わってきて、本村は感激したのだった。一瞬かもしれないけれども、なにかがたしかに結びあったのだと感じられ、うれしかった。

それがあるから、研究をやめられない。

それがあるから、ひととして生きるのをやめられない。

「よかった」

と藤丸は笑い、かたわらに立つイチヨウの太木を見上げた。

(三浦しをん『愛なき世界』より 一部改めたところがある)

(注1) イモ掘り・・・本村はこれ以前に、「イモ」の研究をしている教授から、イモ掘りを手伝わされたことがあった。

(注2) 仄聞・・・うわさに聞くこと。

(注3) 席卷・・・ものすごい勢いで勢力範囲を広げること。

(注4) 陶然・・・心を引き付けられ、うっとりするさま。

(注5) 円服亭の藤丸・・・T大の学生たちがよく利用する食堂「円服亭」の従業員。

(注6) ためつすがめつ・・・いろいろの方向から細々と見る様子。

(一) 波線部 a～d のカタカナを漢字に直しなさい。

a サンサク      b ケイカン      c ヒロ(う)      d ヘンイ

(二) 傍線部①「ひとつのことに没頭しすぎて、視野が狭くなってしまふ」とあるが、次の i、ii の各問いに答えなさい。

i ここでの「ひとつのこと」にあてはまるものは何か。それを表す一語を本文から探して抜き出ささい。

ii 「視野が狭くなってしまふ」った結果、本村が見逃していたものはここでは何か。それを本文から探して十四字で抜き出ささい。

(三) 空欄 ※ にふさわしい内容を、次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 観察力をもっと磨くぞ

イ ちゃんと気分転換するぞ

ウ 運動不足を解消するぞ

エ 研究にいつそう没頭するぞ

オ 視野をもっと広くするぞ

(四) 傍線部②「露ほども思っていない」とは、どのような意味か。「露」という言葉を使わずに「思っていない」に続くように言い換えなさい。

(五) 傍線部③「夏目漱石の小説」とあるが、次のア、イ、ウの中から夏目漱石の作品でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 吾輩は猫である

イ 山椒大夫

ウ 草枕

エ 三四郎

オ 坊っちゃん

(六) 傍線部④「棚上げにしている」と同じ意味の熟語を、次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 保留

イ 拒絶

ウ 崇拝

エ 軽蔑

オ 禁止

(七) 傍線部⑤「本村はそう思い直す」とあるが、ここで本村はどのように思い直したのか。「と思い直した。」に続くように六十字以内で答えなさい。

(八) 傍線部⑥「擬人化する」とあるが、次のア～オの中から擬人化の技法が使われているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 彼は現代の魔術師だ。      イ ベートーヴェンを聴く。      ウ 北風がドアをノックする。

エ 熱いものが頬を伝う。      オ だれだ、私を呼ぶのは。

(九) 傍線部⑦「待たれている」の「れ」と言葉の働きが同じものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつも元気な友人が今日は欠席していて、その様子が気づかわれた。

イ 思いきってタクシーを利用したので、駅まで十五分で行かれた。

ウ 蟬の声を聞いて、子供のころの夏休みのことが思い出された。

エ ちよつとした誤解で、僕はクラスメートから冷たい人と思われた。

オ 小学校でお世話になった先生が、この春退職して故郷に帰られた。

(十) 傍線部⑧「藤丸は「しまった」という表情になった」とあるが、それはどうしてか。その理由として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア おとぎ話の神秘的な世界に心を奪われて、本村との会話は上の空になっていたから。

イ おとぎ話など一度も読んだことがないのに、知ったかぶりをしてしまったから。

ウ おとぎ話のような子供っぽい発想をついににしていまい、気恥ずかしくなったから。

エ おとぎ話を持ち出すことで、本村の気をひこうとしている自分に気づいたから。

オ おとぎ話のような非科学的な話は、本村には信用してもらえないと思ったから。

(十一) 傍線部⑨「本村は唐突に胸が熱くなった」とあるが、それはなぜか。その理由を五十文字以内で答えなさい。

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

みなさんは、毎日のように「前」「後ろ」「右」「左」ということばを使っていると思いますが、これらのことばがどのような意味なのか考えたことはありますか？ 「前」や「後ろ」をはじめとした、位置関係の名前の意味について考えてみましょう。

突然ですが、「ここから前方右手にスカイツリーが見えます」と言われたら、普通、聞き手は何を **a** ソウテイし、どのように理解するでしょうか。前方右手というのはおそらく自分にとっての前方の、自分の右手の方角のことだと思いますよね。でも、電車であなたと向かい合って座っている人が、「あ、右方向に〇〇山が見える」と言ったら、あなたはどちら側の **b** マドを見ますか？ あなたにとっての右でしょうか？ あなたと向かい合わせて座っている人にとっての右でしょうか？

では、「ここをまっすぐ行くと広場があり、そこに大きなクリスマスツリーがあつて、その前にポストがありますよ」と言われた時はどうでしょう？

日本人のあなたは、ポストはクリスマスツリーとあなたの間にあると思いますよね。

でも「ここをまっすぐ行くと、広場に大きなクマの像があります。その前にポストがあります」と言われて、クマの像が下のイラストのような向きで立っていたらどうでしょう？

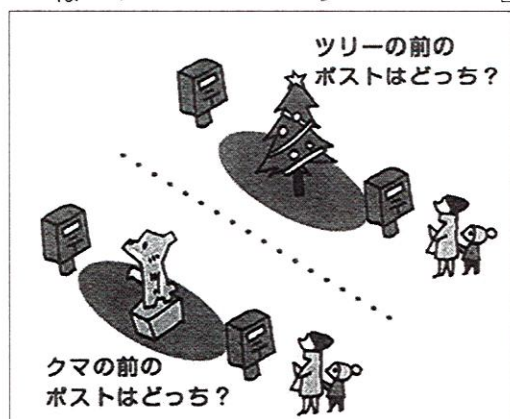
この場合には、あなたにとって遠いほう、へーいー広場の向こう側にポストがあると思うのではないのでしょうか。

この二つの状況では、①あなたは「前」を決める時、別の視点を使っていることに気付きましたか？ クリスマス

ツリーの「前」は、自分とツリーとの関係で、ツリーの手前が「前」だと思ったはずですが、クマの像の「前」はクマの顔のあるほうだと考える人が多いと思います。

つまり、「前」「後ろ」には二つの視点のシステムがあるのです。一つは話者が、自分と自分以外の参照点（この場合はツリーやクマの像のこと）との

関係で、対象（この場合はポストのこと）の位置関係を決める視点です。これを「自己依存枠」と呼びましょう。もう一つは、参照点となるモノに固有の「前」を中心に、対象の位置関係を決める視点です。これを、「参照点固有枠」と呼ぶことにします。参照点固有枠では、話者の視点は関係ありません。



ん。参照点となるモノの向きで「前」が決まります。

参照点固有枠は、もちろん参照点に固有の「前」がないと決まりません。木や山のように固有の前がないモノを参照点とする時には、ヒツゼン的に「自己依存枠」をとることになります。②でも、参照点とするモノに固有の前（顔）がある時、人は必ず参照点固有枠を使うのでしょうか？

このことを調べるため、私は、実験をしてみました。話し手の視点を下のイラストのように決め、参照物体と話し手が対面するようにします。そして、位置を言いたい対象をA、B、C、Dの場所にそれぞれ置いてみます。

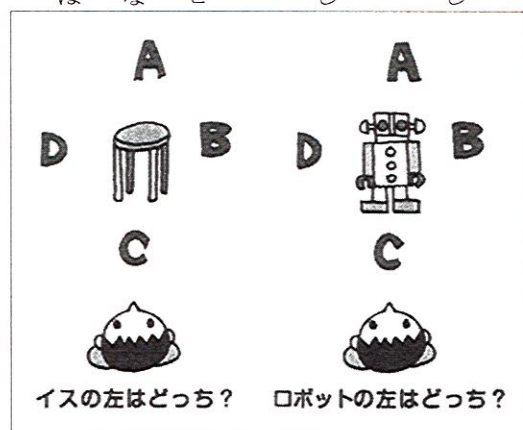
そして、それぞれの場所で、対象物（例えばボール）は参照物体の前、後ろ、右、左のいずれにあるのか聞きました。この時、参照物体を三種類用意して、それぞれの場合について別々に聞きました。

まず、参照物体を背もたれのない、丸椅子まるいすにしてみました。この椅子には、固有の前はありません。実験はコンピュータで行ったので、それぞれの場面で「ボールは丸椅子の\*\*にあります」という文を提示し、\*\*に最も適切なことばを「前」「後」「右」「左」のボタンをクリックして選んでももらいました。その時、実験に参加した人たちはほぼ全員がCを前、Aを後ろ、Bを右、Dを左としました。

次に、参照物体をロボットにして、ロボットを参加者と対面するように正面向きにして、同じように文を提示し、「前」「後」「右」「左」を選択してももらいました。この場合、自己依存枠で考えても、参照物体固有枠で考えても、前は「③」、後ろは「④」になります。しかし、右と左はどちらの枠を使うかで逆転してしまいます。自己依存枠なら「⑤」が右ですが、参照物体固有枠なら「⑥」が右です。結果は、六〇%の参加者は参照物体固有枠を使い、残りの四〇%の参加者は自己依存枠を使っていました。

今度は話し手から見て、ロボットを横向きにしてみました。自己依存枠ならロボットの向きは関係なく、丸椅子の時と同じ選び方をするはずですが、参照物体固有枠で考えると、前後左右はさきほどと変わります。ロボットがBを向いているなら、参加者から見て右が「前」、手前が「右」になります。今度は、参照物体固有枠で決める人がぐんと増え、八〇%にもなりました。

次に、テレビを参照物体にして、話し手と対面する位置に置きました。この時は六〇%の人が自己依存枠をとりました。⑦つまりロボットの時と、枠



のとり方が逆転したのです。

結局⑧この実験から、人は、参照物体に固有の前があっても、いつもそれを中心にした視点をとるわけではなく、(自分から見た)参照物体の向きや参照物体が何かということで、自分と参照点との関係で決める視点と、参照するモノの固有の前を中心にした視点のどちらをとるかをころと変えてしまうということがわかりました。ロボットや人、動物などはいつも話し手と対面しているわけではないので、それ自身の前が視点の中心になりやすいでしょう。それに対し、テレビやコンピュータは、使うときはいつも話し手と対面しているので、それ自身と話し手との関係で視点を決めることが多いのだと思います。へ ii ヽ、モノが自分と対面しているか、横を向いているか、自分と同じ方向を向いているかでも、視点の枠のとり方が変わってしまうのです。

丸椅子のように正面がないモノが中心になる場合は、日本人の大人はほぼ一〇〇%モノと自分の間が「前」、モノの向こう側が「後」だと考えることもあらためて確認されました。

ここまでで、「前」「後ろ」という私たちが日常的にあたりまえに使っていることばが、とても**ドクザツ**な意味を持っていることがわかりました。ちなみに、⑨固有の前をもたない参照物体の前をどうやって決めるのかは文化に依存します。先ほどの実験でも確認されたように、日本人の大多数が、「丸椅子の前のコップ」は「椅子からみて自分側」だと思いました。それは私たちが、あたかも椅子が私たちに対面しているように考えているからなのです。

へ iii ヽ固有の前を持たないモノの「前」がモノの向こう側(つまり話し手にとって遠い方)だとみなす文化もあります。アフリカのハウザという部族がそうです。この部族の言語では、顔を持たない参照物体は、列に並ぶように、話し手と同じ方向に向いていると考えています。

つまり、「前」ということばを使うには、二つの視点システムがあることを理解し、どの状況でどちらの視点がとられやすいかということを知っていなければなりません。自分と聞き手が、同じ視点枠を共有できているかを確かめないと、とんでもない誤解をしてしまいます。しかも視点システムは、さきほどの日本語とハウザ語の例からわかるように、言語や文化によって大きく⑩異なるので、子どもは、母語の文化特有のシステムを**eタイク**していく必要があるのです。

(今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』より 一部改めたところがある)

(一) 波線部 a↘ e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ソウテイ      b マド      c ヒツゼン      d フクザツ      e タイトク

(二) 空欄へ i↘↘ iii↘ に入る言葉としてもっとも適切なものを、それぞれ次のア↘オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい (同じ記号を二度選んではいけない)。

ア なぜなら      イ しかし      ウ つまり      エ さらに      オ すると

(三) 傍線部①「あなたは「前」を決める時、別の視点を使っていることに気付きましたか？」とあるが、次の文章は、この「視点」について説明したものである。空欄へ I↘↘ III↘ に入れるのに適切な語句を、それぞれ字数指定にしたがって、本文から抜き出して答えなさい。

「前」「後ろ」がどこを指すのか決める時、人は二つのへ I 七字↘を使う。一つ目はへ II 五字↘といい、本文のポストの例で言うと、自分とクリスマスツリーとの関係で、ポストの位置を決める視点のことである。二つ目は、へ III 六字↘といい、参照点となるクマの像が持つ固有の顔を中心に、ポストの位置を決める視点のことである。

(四) 傍線部②「でも、参照点とするモノに固有の前(顔)がある時、人は必ず参照点固有枠を使うのでしょうか？」とあるが、この問いに対する答えとしてもっとも適切なものを、次のア↘エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 参照物体に固有の前(顔)があるならば、どんな条件下であっても必ず参照物体の固有の前(顔)を中心にした視点をとる。

イ 参照物体に固有の前があっても、それがいつも話し手と対面するものならば、自己依存枠をとる人は、ほとんどいない。

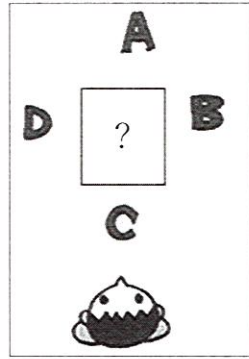
ウ 参照物体の向きやそれが何かによって、自己依存枠をとるか、参照物体の固有の前(顔)を中心にした視点をとるかは変わる。

エ 固有の前(顔)がある参照物体を見てという視点をとるかは、それぞれの人間性によってところどころ変わるためわからない。

(五) 空欄【 ③ 】 【 ⑥ 】 には「A」「B」「C」「D」のうちどれが入るか、記しなさい（同じ語を何度記してもよい）。

(六) 傍線部⑦「つまりロボットの時と、枠のとり方が逆転したのです」とあるが、ロボットでは参照点固有枠で視点をとる人が多く、テレビでは自己依存枠で視点をとる人が多くなる理由を作者はどう述べているか、百字以内で答えなさい。

(七) 傍線部⑧「この実験」をもとに考えた時、人の視点の取り方の傾向<sup>けいこう</sup>として正しいと言えるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。



- ア 参照物体のネコがCを向いている時、Dにボールがあれば、四〇%の人は「ボールはネコから見て右にある」ととらえる。
- イ 参照物体の信号がCを向いている時、Bにボールがあれば、六〇%の人は「ボールは信号から見て左にある」ととらえる。
- ウ 参照物体のトンボがDを向いている時、Dにボールがあれば、八〇%の人は「ボールはトンボの前にある」ととらえる。
- エ 参照物体がスイカである時、Aにボールがあれば、ほとんどの人は「ボールはスイカの前にある」ととらえる。

(八) 傍線部⑨「固有の前をもたない参照物体の前をどうやって決めるのかは文化に依存します」とあるが、次の文章は、このことについて日本とアフリカのハウザ部族を例に説明したものである。空欄へⅠ～Ⅳへ入れるのに適切な言葉を、それぞれ指定された字数で本文から抜き出して答えなさい。

日本人の多くは、顔を持たない参照物体の「前」を、参照物体からみてへ I 三字 〓 だとするが、それは私たちが、参照物体がへ II 十八字 〓 ためである。一方で、アフリカのハウザという部族は、顔を持たない参照物体の「前」を、参照物体のへ III 四字 〓 だとするが、それは彼らが、顔を持たない参照物体は、へ IV 二十六字 〓 いるためである。

(九) 傍線部⑩「異なる」とあるが、「異」という漢字を使った次の i 〓 iii の四字熟語が何であるかを考え、□の空欄に入れるのに適切な漢字三字を語群からそれぞれ選び、記しなさい(語群の漢字は何度選んでもよい)。

- i 異 □ □ □ 〓 全員が同じことを言うこと。または、全員の意見が一つにそろうこと。
- ii □ □ □ 〓 小さな違いがあつて完全に同じではないが、ほぼ同じこと。大きな差がないこと。
- iii □ □ □ 〓 異 〓 奇妙な自然現象や自然災害のこと。

語群 【上 下 同 天 温 音 知 地 口 大 小 完 変】

(十) 本文の内容に合うものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「前」という言葉を使う時、参照物体に固有の前がなければ、話し手の視点のとり方は国境を越えて共通している。
- イ 日本人は「前」「後ろ」にたくさん意味があることを理解し、毎日の生活では十分に注意をはらって使いこなしている。
- ウ アフリカのハウザ部族は、参照物体に正面がない場合、自己依存枠と参照物体固有枠の両方の視点をとることがある。
- エ 子どもは、母語の文化の中でしっかりと生きていれば、どこの国に行っても「前」「後」を誤解することはない。
- オ 人が「前」や「後ろ」がどこなのかを決める時、自分と聞いている人の意見がすべて一致するとは限らない。





【解答】(120点満点)

① (20点)

(1) イ、カ、サ

(2) 4

⑤ × 3  
⑤

② (50点)

(一) a 散策 b 景観 c 拾(う) d 変異

② × 4

(二) i 種採り ii 黄色い葉をつけたイチヨウの梢

③ × 2

(三) イ

③

(四) 少しも(思っていない) 全然(思っていない)

③

(五) イ (六) ア

③ × 2

(七) どんなひとの営みも、終わりがなくはかない行いだと思ったが、ひとに生まれたからにはせずにはいられず、無駄にはならない(と思い直した。)(五十七字)

⑧

(八) ウ

③

(九) エ

③

(十) ウ

④

(十一) ラッパのように丸まったイチヨウの葉を見て、不思議だと思った気持ちを分けあえたと思つて感激したから。(四十九字)

⑥

③ (50点)

(一) a 想定 b 窓 c 必然 d 複雑 e 体得

② × 5

(二) i ウ ii エ iii イ

② × 3

(三) I 視点のシステム II 自己依存枠 III 参照点固有枠 (完答)

③

(四) ウ

③

(五) ③ C ④ A ⑤ B ⑥ D

① × 4

(六) ロボットはいつも話し手と対面しているわけではないのでそれ自身の前が視点の中心になりやすいが、テレビは使う時いつも話し手と対面しているのでそれ自身と話し手の関係で視点を決めることが多いと考えられるから。(100字)

⑥

(七) ウ

⑤

(八) I 自分側 II 私たちに対面しているように考えている (I・II完答)

③

III 向こう側 IV 列に並ぶように、話し手と同じ方向に向いていると考えて (III・IV完答)

③

(九) i (異) 口同音 ii 大同小(異) iii 天変地(異)

① × 3

(十) オ

④